

第19回防衛問題セミナー議事録（平成24年10月26日（金）1800～2055）

司会：定刻となりましたので、ただいまから、南関東防衛局主催の第19回防衛問題セミナーを開催させていただきます。

本日はお忙しい中、ご来場いただきまして誠にありがとうございます。私は、本日の司会をつとめさせていただきます南関東防衛局地方調整課の北原と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、主催者である南関東防衛局長・山本達夫より開会の挨拶を申し上げます。山本局長よろしくお願いいたします。

局長：ただいまご紹介いただきました防衛省南関東防衛局長の山本でございます。主催者を代表いたしまして、一言ご挨拶させていただきます。本日は皆様、お忙しい中、南関東防衛局主催の防衛問題セミナーに足を運んでいただきまして、誠にありがとうございます。心から御礼を申し上げます。

本日のセミナーは、「大規模災害の備え」と題しまして、地域における防災の在り方をテーマとしております。昨年3月にありました東日本大震災におきましては、東北地方沿岸地域に未曾有の被害がもたらされました。そういった中、日々当然のように機能しておりましたインフラあるいはユーティリティーが衰滅されたもとの、自衛隊は自己完結性というものを組織の原点としておりますけれども、自衛隊が被災者の支援、あるいは被害復旧という形で中核的な役割を果たし、国民の皆様からも大変評価をいただき、信頼をいただいたところでございます。また国際的にも自衛隊が極めて短期間のうちに部隊展開をして、大規模なオペレーションを行ったことにつきまして、様々な国の軍事専門家あるいは防災の専門家から大変高い評価をいただいたところでございます。本日は、これら自衛隊の活動等につきましてお話をさせていただき、この機会を通じまして、皆様方に防災の在り方、あるいは地方公共団体と自衛隊との連携、協力の在り方について紹介していただきたいと思っております。

本日のセミナーは2部構成となっております。第1部は講演会ということで、まず山梨県環境科学研究所の荒牧講師から富士山噴火の防災についてお話をいただき、また、陸上自衛隊駒門駐屯地の伊崎1等陸佐からは、東日本大震災における自衛隊の活動の在り方についてお話をさせていただくことにしております。第2部につきましては、演奏会ということで、陸上自衛隊富士学校の音楽隊の皆さんに「響け 富士北麓の夜空に」と題しまして、力強くまた心に響く演奏をお願いをしているところでございます。本日のテーマは防災ということで、自衛隊にとりまして、災害派遣というのは非常に重要な任務でございますけれども、併せて自衛隊の主たる任務は我が国の防衛でございます。とりわけ、昨今様々な形で我が国の周辺でいろいろな事象が起きており、防衛についての関心も高まっているということで、大変恐縮ですけれどもこの機会を借りまして、冒頭若干、我が国を取り巻く安全保障環境についてご説明をさせていただきたいと思っております。

これが我が国の安全保障環境を1枚の図で整理したものでございます。1つは朝鮮半

島の問題がございます。北朝鮮による核実験、あるいは今年の4月の「人工衛星」と称するミサイル発射、また、北朝鮮の体制につきましても、昨年、金正日氏の死去に伴いまして、金正恩氏への体制の移行が図られておりますけれども、その行方も不透明な状況でございます。また、北朝鮮が韓国に対しまして挑発的な行動を繰り返しているというのが懸念材料としてございます。

もう1つは、ロシアの動きでございますけれども、ロシアにつきましても最近経済の回復に伴いまして、様々な情報収集等の活動を活発化しているということがございます。

またさらには最近では大きな懸念としてありますのは中国の活動でございます。1つは我が国周辺における活動ということで、尖閣諸島を中心とする我が国周辺海域におきまして、各種の情報収集活動、あるいは一昨日もございましたが中国の公船、海軍ではありませんけれども、漁政といった法執行機関の船が監視行動を行っているというのがあります。もう1つは、中国の海軍による遠洋海域への作戦能力の向上でございます。特に2008年以降、中国海軍の艦艇が太平洋に進出をしているということがございます。中国は第一列島線という、フィリピン、台湾、沖縄諸島を結ぶ線でございますけれども、第一列島線の内側の海域については中国の海軍が完全にコントロールする。また、第二列島線というグアム、小笠原諸島をつなぐ海域については、具体的にはアメリカの空母が入ってくることを防御するという考え方に立っていると言われております。そういった中で我々日本としての懸念としますと、日本のシーレーンの周辺で中国海軍の活動が活発化し、能力の向上が図られているということがございます。

具体的に懸念としてありますのは、中国の海空戦力の近代化というのがあります。中国国防費自体が、ここ5年で倍増、過去24年で30倍というふうに増えておりますけれども、そういった国防費の増に伴いまして、戦力の近代化が行われており、海軍につきましてはより遠方の海域で作戦をする能力をつけてきているということでございます。10年前は、中国の海軍と言ってもそんなに警戒することではないという専門家の方もおられましたけれども、この10年間で例えば水上艦艇ですと、近代的な船というものが倍以上に増えてきております。また、潜水艦につきましても、10年前に比べますと新型潜水艦と言われるものが6倍あるいは7倍に増えてきている。なおかつ能力を向上しているということで、例えば潜水艦につきましても、静粛化が進んで探知が困難になってきており、加えて初めての空母「遼寧」が就役をしているということでございます。航空戦力につきましても近代化がなされておきまして、近代的な航空機の数というものがここ4～5年急激に増えてきているという状況でございます。先ほどもご紹介しましたけれども、中国の側から太平洋を見た図で、青島、寧波、湛江というところに大きな基地がございますけれども、その基地から太平洋、まさに先ほどお話しした第二列島線と言われる太平洋の海域に出て行くためには、沖縄本島と宮古島の間海域を出ていくことが必要であるということで、2008年以降、数多くの中国の艦艇が部隊として沖縄本島と宮古島の間を通過して太平洋で活動を活発化している。また、我が国周辺では中国の公船の活動が活発化しているということで、海上自衛隊は警戒監視活動をやり、海上保安庁と連携をしながら対応しているという状況でございます。

そういった中で日本の防衛はどうかということを考えてみますと、防衛関係費の推移は平成14年をピークにしまして、以後、逐次低減をしており、日本全体の財政事情が

非常に厳しいという中で、防衛費についても抑制を求められているということで、平成14年に比べて平成24年は約3000億円の減となっているという状況でございます。過去10年の国防費の推移を他の国と比べてみますと、日本は0.94倍でございますけれども、日本を除く多くの国と言いますか、ほとんど全ての国はこの10年間に国防費を増額しております。中国については3.47倍、米国も2倍、欧州諸国も1.36倍、ロシアも5.34倍ということで、他の国が国防費を増額している中、日本は限られた予算の中で各種の整備活動を行っているということでございます。

そういった中で今後の防衛の在り方をどうするかということでございますけれども、平成22年に防衛計画の大綱というものができました。その中でうたわれております「動的防衛力」という考え方でございます。従来は「基盤的防衛力」ということで、存在することによる抑止というものを重視をしておりました。それに対しまして、「運用」を中心として普段から警戒監視活動等を行い、仮に何らかの事態があった場合には迅速に対応できる態勢をとり、併せて諸外国との協力関係を推進していくことによって我が国に対する各種事態の抑止と対処を図り、地域の安定化を図り、さらにグローバルな安全保障環境の改善をするということを目指しております。以上が我が国を巡る安全保障の状況と我が国の取り組みでございます。

大変厳しい安全保障環境の中、限られた資源で我が国の安全と平和を守るという任務を達成すべく日々努力をしているということをご理解をいただければというふうに存じます。また、国防という観点からしますと、この地に所在します北富士演習場も我が国の防衛にとって大変重要不可欠な施設でございまして、安定的な使用のために地元の皆様方から日頃ご理解とご協力をいただいていることをこの場を借りまして改めて御礼を申し上げたいと思っております。今後とも施設の安定的な使用と地元の皆様の民生の安定との両立をはかるべく最大限努力をしまいたいというふうに考えております。若干長くなりまして恐縮でございますが、本日のセミナーの趣旨と我が国の防衛を巡る諸状況についてご説明をさせていただきました。本日、お時間の許す限りお付き合いをいただければ幸いです。本日は来場誠にありがとうございました。

司会：どうもありがとうございました。続きまして、ご来賓を代表いたしまして、富士吉田市長・堀内茂様よりご挨拶を賜りたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

富士吉田市長：皆さん、こんばんは。寒くなりましたね。今朝は富士山の七合目まで雪がかぶっておりました。そして富士北麓、いよいよ紅葉のシーズンであります。実は今日から紅葉のライトアップということで、今日は山中湖村長さんと忍野村長さんがお見えですけれども、ライトアップが今日から山中湖がスタート、富士吉田もスタートします。そして明日からは忍野、更には河口湖も加わりまして、明日からは富士北麓いっせいに紅葉祭りということでございます。このような秋、大変素晴らしい時期でございます。

この秋の夜長に皆さんに対しまして、南関東防衛局のお陰をもちまして、防衛問題セミナーという形で防災に関する講演会が開かれるわけでございます。一部としましては、新聞、テレビ、週刊誌で一一年中騒いでおります、富士山がいつ爆発するかわからない、このことに対しましてもしっかりと富士山を見届けていただいております。日本火山学

会、そして国際火山学会の会長でもあられる荒牧講師の講演、さらには、東日本大震災で多大なご苦勞をなされ、また被災地に最大10万人という人員を送り出した自衛隊の伊崎1等陸佐がお見えでございます。今回の自衛隊は特に日本国民に対してなんて心強い存在なんだろうと、改めてそのありがたさを知らされた感じがします。このお2人による講演をいただきまして、そしてこのような堅い話の後で、皆さんの心をリラックスしていただくという粋な計らいで、南関東防衛局長さんの温かいご厚意によりまして、陸上自衛隊富士学校音楽隊のコンサートということでございます。ぜひ、このコンサートの方も楽しんでいただきたいと思います。

皆さんのお座りいただいております、この富士吉田の市民会館、ふじさんホールですが、富士吉田には山中湖、忍野も含めて防衛の演習場がございます。この演習場の円滑なる使用のもとに、様々な施設に対して防衛局からの補助がありまして、ここを建てる時にも大変大きな補助をいただきました。また、皆さまの近くにあります5か所の大型の防災備蓄庫、これらに対しましても大きな補助をいただく中、素晴らしいあのような備蓄庫ができて上がったわけでございます。もっと言えば、皆さんの近くにありますコミュニティーセンター、これらも防衛局からの補助をいただきながらやっております。そして皆さんの町で夜に寝ている時にも見回りに行く消防団の消防自動車、これも富士北麓の消防車はよその地域と比べて格段に素晴らしいです。最新型の最新鋭の消防自動車が導入されております。このような地区はほとんどないのです。これも防衛局から補助をいただいて適宜更新をさせていただいているということで、新しい車両が入っております。こればかりかいろいろ言うときりがありません。あとは障害防止工事で富士山が万が一土石流や雪崩、こういうときにも一気に落ちてこないような障害防止工事など見えないところでも、大きな工事もやっております。

いずれにしましても、こういうような中、富士北麓、山中湖、忍野も含め、南関東防衛局の協力のもとに、市民の皆さん、村民の皆さんの安心安全のために自治体も協力しながら一緒に対策を進めているわけでございます。3.11の震災以降、我々自治体は市民、村民の安心安全を最優先課題として行っております。今後とも皆さんからの協力がなければ確実なる防災体制はひけません。皆さまにこれからも災害のない明るい安全な町づくりのためにご協力をいただくことをお願い申し上げます。どうぞ本日は最後までごゆっくりお聞きいただき、楽しんでいただきたいと思います。本日は大変ご苦勞様でございます。

## 【第1部】

司会：ありがとうございます。それでは、第1部を始めさせていただきます。

山梨県環境科学研究所長・荒牧重雄様よりご講演をお願いしたいと思います。荒牧講師についてご紹介させていただきます。講師は、こちら富士吉田市剣丸尾に所在する山梨県環境科学研究所の所長を2004年から務められております。また、2001年から2004年にかけて作成された「富士山ハザードマップ」検討委員会委員長を務められ、今年6月に山梨県・静岡県・神奈川県で協議が始まりました「富士山火山防災対策協議会」の識者としても参画されております。そのほか、日本火山学会長、国際火山学会長として火山学をリードされてきた有識者であり、テレビや各地でのご講演を

行われるなど、多方面においてご活躍されております。本日、ご講演いただくテーマは、「富士山噴火の防災」であります。それでは、荒牧講師、どうぞよろしくお願い致します。

荒牧講師：みなさん、こんばんは。ご紹介いただきました荒牧でございます。今日は、こういう題でお話をさせていただくことになっておりますが、少々残念であります。なぜかと言いますと、私はもう定年退職いたしました。現役の頃は、私は理学系統でいう火山学という研究をしておりました。もちろん富士山を含めて、日本は素晴らしい火山がいっぱいあります。素晴らしいといったのは、景色が素晴らしい、それから、山に登っているいろいろ調べますと、火山がどうやって噴火するのだろうか、そういうからくりといいますが、そういうものが非常におもしろいというか、あんまり勉強というと堅苦しいですが、そういう喜びというかおもしろいということを非常に痛感いたしました。非常に愉快的な人生を送らせてもらったと思っております。今日の話は「防災」、すなわち災害をどのように防ぐのかという話になります。そういう意味で残念だと申し上げたのですが、皆さんご存じのとおり富士山は、素晴らしい景観やその他いろんな恵みを与えており、例えば、山腹での観光産業は、富士山なしに語ることはできないと思います。そういう素晴らしい自然の恵みというべきだと思いますが、我々人間の社会生活を守るという意味で災害を防ぐ、そういう意味で重要なテーマであると思っておりますので、そういう話をさせていただきます。

これは、今年5月の新聞でございます。ご覧のように3県、山梨県、静岡県、神奈川県で防災協議会を作ってスタートしました。3県で共同して富士山の火山防災をやろうということで、直接思い至る関係として、当然去年の3月11日の大地震から考えてみようと思っております。ご覧のように、日本列島は北海道のてっぺんから九州の南まで全部振動いたしました。これは皆さんご承知のとおり非常に大きい地震であり、このバツ印が地震の中心ということになります。こういう地震というのは、皆さんご存知だと思いますが、太平洋プレートが東から押してきて滑るわけですが、滑るといっては断層が動くわけで、その断層が動く大きさを見ると、色がついている部分がほぼ南北に伸びた四角い板みたいになっており、真ん中の赤くなっている部分が、一番大きくずれたところです。まわりを見ると目立たないが、500kmの長さですれ、どのくらいの時間かかってずれたのかということ、これがその図であり、0秒、100秒、200秒とありますから、180秒ぐらい、3分ぐらい揺れていたということです。この図のカーブを見ますと、1分ちょっとのところが一番強く揺れています。これは、大変な地震だということが揺れる長さからもわかりました。私ですら大変大きな地震だとわかりました。「3分揺れた」ということを覚えておいて下さい。これは、地震の後で小さい地震、「余震」と言いますが、いっぱい起こる訳で、「狭義の余震」と言いますが、これは当然地震断層の周りにずっとぶつぶつができ、集中というか群発しております。内陸の浅い群発地震は、誘発された広い意味での余震であると、これは、大きな地震だったわけですから、ほとんど全国にわたって余震が発生したことがわかります。火山の専門家として、これは大変だと思い、まず頭に浮かんだことは、活火山が日本にいっぱいあることから、それが噴火するのではないかと思いました。地震で揺れますと、地下にマグマがあるのは間違いないので、いつか隙があつたら噴火しようと思っっているかもしれません。これ

だけひどく揺れたので、何らかのきっかけで噴火するのではないかと思い、ヒヤヒヤとかドキドキしていましたが、結論を言いますと、少なくとも今まではどの火山も噴火しませんでした。今までというのは、この1年何か月という意味ですが、まだわかりません。ですが、とにかくすぐ後で火山が噴火しませんでした。ある意味で、胸をなで下ろしましたが、またある意味で、なぜ噴火しなかったのかという疑問も浮かびました。それに対する答えがないのですが、事実としてそういうことであります。ただし、ここに書いてあるように気象庁が発表した全国13の、実際は20ぐらいですが、活火山が活発化しました。活発化が具体的にどういうことかという、20ぐらいの火山の小さな群発地震というか、火山の真下で起こる小さな火山性の地震が一斉にバツと起きました。これは、時間的に見ると3.11の大地震の引き金で、火山に特有な小さな地震が起きたというのが結論です。そのくらい影響を受けましたが、噴火に至らなかったということでもあります。

また、少し翻って、災害というものをずっと通観してみると、1945年に日本が太平洋戦争で負けた終戦から今までを考えてみますと、縦は、死者、行方不明者の数です。終戦後は、いろいろ災害があつて亡くなった人も多かったわけです。その後、伊勢湾台風が起こりまして、このときは6千人近くが亡くなったという強烈な災害がありました。これは台風による災害。この後、ご覧のように被害はずっと小さくなりました。それで、突然起きたのが、1995年の阪神・淡路大震災で、この時亡くなった方が6千人を超えました。またその後、静かだと思っていたら、ご存じのように去年大地震が起きました。これはこのグラフを飛び越えますが、約2万人の方が亡くなったか行方不明になっています。これが、終戦後60何年間の概観で、注目していただきたいのが、伊勢湾台風の後で、法律が改正され、日本はいろいろ災害があるから、それに対してちゃんと防がなくてはいけないという法律で、かなり防災対策は良くなったと言えるべき結果として、ご覧のようにずっと静かになっていました。この40～50年間、ある意味で平和でしたが、突然、阪神・淡路大震災で大ショック、危機管理がうまくいかなかったとご存じの方もいらっしゃると思いますが、これはいかんという話で何とかしなくてはと云ってうちに10何年経って、去年大地震が起きました。これは私は、災害防止の社会的な学問の専門家ではありませんけど、自然科学的な人間ですが、見ているといかに防災危機管理がまずかったかということを感じました。たぶん相当部分の皆さんがそういうことを感じたのではないかと思います。これはいかんということがありまして、少なくとも私の関心がある、私の担当している火山の噴火に対する災害を防ぐということを、もう少し頑張らないといけないという印象でございます。

実は、3.11の大震災の直前に、九州の霧島山の新燃岳がご覧のように噴火しました。かなり目覚ましい噴火といいますか、これは大変だということで、いろいろマスコミなんか騒いでいました。こういう噴煙が立ちまして、風下に灰が降りました。これは、噴火口の中に溶岩のお餅みたいな、饅頭みたいなものができて、灰が積もって農作物の白菜が無茶苦茶になって全部やられてダメになってしまったという災害も起きました。自動車に灰が積もっているというのだと大したことないみたいですが、このぐらい積もりますと、一般的に灰が積もった道路を運転したという経験は少ないわけですから、普段どおり時速40kmくらい出して、赤信号でブレーキを踏みますと、スーッと滑っ

て、ガチャンと。要するに灰が降ると、自動車がよく交通事故を起こすという危険性もあります。掃除するのも大変で、雪ではないから溶けませんし、いろいろと大変でしたということがあって、これから霧島山の噴火をしっかりと研究しようとしていた矢先、3. 11の大地震で日本中の防災の専門家がみんなそっちに行ってしまったので、中途半端になってしまって、火山防災としたら、断絶しているような感じでございます。

富士山に戻ります。少し遡って考えますと、まず、あんまり古いところは、私ももちろん知らなくて、あとで本を読んだのですが、ずいぶん古いですが、「富士山大爆発1983年9月X日」という本が出たそうです。それが大いに売れて、年月日の日はX日ですが、年と月は指定している予報なので、大変な騒ぎになったそうです。実際に、その運命の日の1983年9月を過ぎても噴火しなかった。大爆発が起こらなかったというわけで、大変世の中を騒がせたということがあったそうです。ですから、地元の方は、観光産業の当事者を中心に、非常に悪い思い出を持っており、そこから話はスタートしますが、2000年になりまして、ワークショップが富士吉田市でありまして、その当時の市長や村長等が富士山が噴火する可能性があるなら、前向きに防災に取り組もうという発言がありました。ここが一種のターニングポイントです。それまでは、私は東京の人間で、こちらの富士吉田市とか富士山の麓の人の悪口を言うつもりは毛頭ありませんが、あまり前向きではなかったと言われてもしょうがない部分もありました。要するに「富士山の噴火なんて口に出して言うな」という雰囲気もあったと聞いています。ありがたいことに2000年からは、そういうことはなくなって前向きに取り組んで、これがずっと今も当然続いており、これがスタートです。ところが、このワークショップをやっている最中に、実は地下、富士山の直下で低周波地震というのが何百回も起きました。人体に感じないんですが、火山学者にとってはショックです。非常にはっきりとした火山性の地震で、富士山の下にマグマがいるということを実感させられたという感じで非常にびっくりしました。そしてマスコミが騒ぎ出して、結局2001年に富士山ハザードマップ作成協議会というものを発足しました。それから私も富士山にご縁があるようになりました。この低周波地震というのはあまりよくわからないかと思いますが普通の地震です。低周波地震というのは周期がぬらぬらと長い間続く感じの地震を申します。こういうものが何百回も、富士山を中心として起きました。これは断面図です。

また少し元に戻って、地球上でどうして火山が噴火するかという話まで戻りたいのですが、日本はここにあります。地球上はいくつかのプレートに分けられ、プレートの集合であると考えられます。これが太平洋プレート、そしてこっちにも大きいのがありまして、ユーラシアプレートというのが頑張っています。二大プレートです。そしてオーストラリアプレートというのもありますが、日本列島に関係あるのはフィリピン海プレートという小さいプレートがあります。そこに北米プレートとつながっているのがありますが、日本列島、特に富士山のあたりというのは3つのプレートがちょうど突き合わせとなっています。赤い矢印というのは相対的な運動を示してしまっていて、ユーラシアプレートは大きくて動いていないと考えますと、それに対して相対的に太平洋プレートというのは北西方向にどんどん押しています。これは衝突が起きているわけです。フィリピン海プレートも同じです。衝突でどういうことが起こるかという、太平洋プレートは北西方向で押しています。フィリピン海プレートは北西方向で押しつつも、北東方向

に押す力を持っているため、太平洋プレートはここで斜めに潜り込んでしまう。フィリピン海プレートもユーラシアプレートに斜めに潜り込むということで、スルスルと滑り込めばいいのですが、ジリジリと摩擦が起きまして、ここで潜り込むプレートの先で大地震が時々起こるのはご存じのとおりであります。そういうことでたくさんの地震が、特に東日本の東の沖合で太平洋プレートが潜り込んでいるところにいっぱい起きます。

火山を見ますと、これがプレートの境ですが、その境から内陸側に100～150 km離れたところにずらっと火山が並んでいます、まさに火山のプレートの境に並行なわけです。こっちもそうで、フィリピン海プレートとユーラシアプレートの境に並行にあります、フィリピンまで行っています。そういう図式ですから、これは明らかにプレートの境界と火山の分布が同じであるということがわかります。

話が前後して恐縮ですが、ここに富士山の例が出ました。これは今年の3月11日にここでマグニチュード9.0というすごい地震が起きました。それで富士山はどうだと思っていたんですが、全然静かでした。ところが3日半経ちまして地震が増えました。というかここで非常に大きな地震が起きたというべきかもしれない。マグニチュード6.4というのが富士山直下で起きました。噴火はしません、地震だけ。皆さん覚えていらっしゃると思いますが、実は火山の下の中で地震が起こるときはそう大きいのは起こらないのです、普通は。マグニチュード6.4というのはとんでもなく大きな地震です、火山性の地震としては。それが起きたというのをどう考えたら良いかは今でもわからないのですが、そういうことが起きました。あとは細かい余震です。こういうことが起きましたので、何となく不気味というか、そういうことがあります。

また話が飛びますが、2001年の先ほど申し上げた最初の群発地震がたくさん起きた頃、静岡県、山梨県、神奈川県、東京都まで巻き込んで、その4都県で富士山のハザードマップを作りましょうと。広域避難等を検討するという協議会がすでにできました。これは今どうなっているかという、言い方は悪いですが有名無実というか、実際は存在していないのです。10年～11年経って、今年の6月に今度は山梨県、静岡県、神奈川県の3県で協議会をやるということで、発足してから半年経っていないという状態ですが、現在は防災対策が進んでいます。なぜ神奈川県と東京都を入れるかは後でお話しますが、富士山は過去に大噴火をしまして、宝永噴火というのがありました。これは軽石や火山灰が空高く噴き上がって西風で流されるから東へ降り積もります。それで東というと神奈川県と東京都まで行ったというので、そういう噴火がまた起こるとあなた方も被害を被りますということを含めて東京都まで話は持っていきました。東京都はあまり直接は、今年からスタートした協議会には入っていませんけれども。

そこで富士山の周りを見ますと、まず住んでいる人口を見ますと、山麓地域と言うべきでしょうか、これが主として山梨県と静岡県で70万人くらいいらっしゃいます。これは直接に富士山が大噴火をすれば影響を受け、これは富士吉田の市民も入っている、そういう人々です。一方、いわゆる一時滞在人口は観光客が主ですから、こういう人はなんと3千万人かそれ以上も来ます。ですから、そういう人は当然、富士山が活動すると影響を受けます。これが宝永噴火の時の灰が降った範囲ですから、神奈川県もほとんどすっぽり被害を被るし、東京都も降るといいます。逆に言いますと、静岡県より西の人はこれだと関係ないです。山梨県もご覧のように甲府盆地にいる人はほとんど関



係ない。宝永の話だけですけれど。こういう偏りというのは当然あるわけです。富士山で特に警戒すべき加害現象は、火山の噴火の仕方というのはいろいろあり、従ってそれによって起こる災害もいろいろあります。ここに問題がありやっかいなところですよ。例えば噴石というのは、火山砕屑物などが飛んできて当たったら死んでしまいますから危ない。隣で次の赤く書いてあるのは、火災物降下というのは、要するに軽石とか火山灰が上から降ってきます。火山弾が飛んできてくるのは斜めから飛んできますが、そうではなくてほとんど真上から夕立みたいに降ってきます。ちょっとメカニズムが違うのです。これが宝永噴火です。この赤で書いたのは重要ですよという意味でよく気をつける必要があります。それから溶岩流、これはご存じ富士山の麓は溶岩流がたくさんあります。ですから我々が今いる場所は、剣丸尾溶岩という溶岩流が今から千年近く前に流れてきました。ちゃんとここまで流れてきているのですから、溶岩流は気をつける必要があります。それから火砕流・火砕サージ、これは後から申し上げますがこういうものもある。それから土石流・泥石流、これも富士吉田市は泥石流で実際被害を被っているからおわかりだと思います。あといくつかありますが、黒で書いたのはそんなに重要ではないというか、ひどい被害を与えるものではないので、ここではあまり議論はしません。

それでは防災、災害を防ぐということをどういうふうにするかということ、他の自然災害と噴火の災害は違いますということを申し上げたいと思います。噴火が始まり、災害が発生しますと、第一報が入るわけです。例えば住民の方が電話をかけてきます。そうすると「噴火しました」、そして何処と場所も口で言えばわかります。そこから先なのですけれども、どんな噴火というのを聞きたい。聞きたいという意味は、電話を受けますと「火事です、何処です」、そこまでは聞いて、消防車がすっ飛んで行きます。その時に例えば、火事にもいろんな火事があります。化学工場などいろんな薬品を作っている工場などは、いきなり水をかけると危ないというのは聞いたことがあるかもしれませんが、ですからそういうときは特別な消火の仕方をしなくてははいけません。ところが実際の火事というのはそんなものは希ですから、普通は「火事です、何処です」「分かった」と言ってすぐ行きます。噴火はそうはいかない。どうしてか。「どんな噴火ですか」と聞かないと次にこれだけ種類があります。プリニー式噴火というのは、先ほど言いました宝永噴火みたいなものです。それから上の溶岩噴泉・溶岩流というのは、これは青木ヶ原を作った今から1200年前に噴火した、ああいう噴火です。その時それぞれに防災対応が全く違います。ここを理解していただきたいと思います。簡単に言いますと、噴火というのはやっかいなのです。どれというのをまず知る必要があります、これには専門的な知識が要ります。それからもう1つやっかいなことがあります、長く続くのか短い時間で終わるのか分からないのです。他の自然災害というのは火山災害に比べるとそんなに長く続かないです。先ほど言いました大地震、マグニチュード9.0。3分間で終わったのです。終わると後は復旧復興を一生懸命やります。いわゆる発災と言いますが、災害が発生する期間はわずか3分です。もちろんその後で津波が来ますから、これは何時間か繰り返し来たりするので、これはまた別の問題ですけれども、1日経てば終わります。台風というのはどのくらいかということ、我々が住んでいる中緯度地方というのはそんなに停滞しませんから、いくら長くても2日か3日で行ってしまうくらいのは長さです。そういうふうにしていろいろな自然災害を見ていくと、数日ずっと続く自然災害

はあまりないのです。ところが、噴火というのは、15分間で終わる噴火もあれば、15年間続く噴火というのも世の中にはあるのです。

こういう話というのは、活火山は日本にはたくさんありますけれど、それを見ているだけでは足りません。私みたいないわゆる専門家、研究者が国民の税金をいただいて、実は海外に見に行くのです。なぜそうして見に行くのかというと、日本の中で噴火を見ていて、噴火というのは全部わかったというには足りません。噴火というのはそんなに頻繁には起こらないし、多種類の噴火がありますから、私みたいな人間が海外の噴火を、少なくとも私が学生で卒業してから定年退職するまでには大きな噴火は全部見ました。ですから私は責任を感じて、私の体験というのはそう他の人はいないわけですから、それを還元するというか、それを基にして防災というものに力を尽くさなければいけないと思っているわけでございます。それで申し上げたいのですが、噴火というのは種類が非常に多く、非常に長く続く。やっかいです。やっかいですけれども、それでは良い面はどうか、良い面と言うかはわかりませんが、噴火というのはそう頻繁に起こらないのです。大体皆さん、噴火を体験した人はそんなにいないと思います。「噴火を見たことあるよ、テレビで。」それはダメです。テレビの噴火というのは、マスコミが絵になるところを拡大して出しますから、あれを見て噴火のイメージができたというのはダメです。絶対違います。

そういう意味で噴火に対する防災活動というのは、スタートからして非常に難しいです。難しいところの大部分はというのは知らないというか、知る必要がある、そこなのです。そこで私みたいな人間がしゃしゃり出てきて何だかんだと申し上げるのです。富士山の場合は4つ赤で書きましたけれども、こういうものを特別に指定して注意する必要があります。繰り返しになりますが、それぞれに違うストーリーです。だから対処方法も全然違う、これを頭に入れておく必要があります。富士山は最近何年間噴いていないか。なんと300年間噴いていないのです。これはとんでもない話で、我々のじいさん、ひいじいさん、もっと更にひいひいじいさんまで知らないわけです、噴火を。江戸時代の中期ですから。こういうある意味で難しい点があるということを申し上げます。これは噴火に種類があると申しましたけれど、青木ヶ原が噴火しました。これは随分大きな噴火で、2年間続いたのではないかとされているのですが、こんな感じだったと思われま。溶岩が噴水のように噴き上がって、下の方は溶岩が流れているのですけれども、こんな感じですよ。煙も出ますが基本的に川みたいに溶岩が流れてくる。これはあまり怖くないのです。どうしてかという、流れてくる速度があまり速くないのです。人が歩いて大抵逃げられる、極端に言う、溶岩では人は死なない。そういうふうに言い切れると思います。夜になるときれいです、川みたいにくっついて流れが分かれて流れてくる。これがもう少し厚い溶岩で、後ろに家があるからおわかりだと思いますが、じわっと流れてきます。これはみんな外国の話です。これはついでに申しますが、伊豆大島で噴火しているのですが、溶岩に水をかけています。これはどういうことかと申しますと、冷やそうとしているわけですよ。ところが溶岩というのはすごく大量に来ますので、こんなホースを2~3本付けて水をかけてもダメで、マスコミの人が「こういうのを焼け石に水って言うのですね」って言っていましたけれども、それではなぜかけるか。これは実験をやっております。どういう実験か。それでも集中的に溶岩がやってくる前面に水

をかけます。そうするとそこは当然冷えるわけです。そこだけ固くなります。他は溶けている。それでどんどん後ろから来ますが、そこに1か所固くなって頑張っているところがあると、後ろから来る溶けた溶岩が横へ流れるじゃないですか。それが頑張っているれば溶岩の向きを変えられるかもしれない。そういうことができるかできないかをちょっとやっています。私が直接関係している実験です。そういうのは他の国ではあまりないのですが、日本はこういうのをよくやられていて、レスキュー隊の人達が水をかけています。これは実は北富士演習場をお借りして、重機を持ってきて溝を掘っているのです。これは先ほど言いましたように、上流から溶岩がゆっくり流れてきます。もし下流に非常に重要な拠点病院みたいな病院があって困るというような時には、大勢で溝を掘ればいいのです。別の所に流れていきます。そういうことがどのくらいの速度で溝が掘れるかという訓練をやったのです。これは富士山の麓ですから、他の国ではこんなことはあまりやっていません。ただし問題がありまして、向きを変えるのは多分できる。すると今度は向きを変えられた方に人が住んでいると困るわけです。こういうことは他の火山国で、例えばイタリアのシチリア島などは何百年前からこういう経験をして、なんとか向きを変えようとするわけです。変えられた方と喧嘩になって騒ぎになるのでなかなか難しいです。

という訳で、多種類の噴火災害が起こります。それぞれについて考えなくてはいけないけれど、富士山というのは、いろんな噴火をしているのです。貞観噴火というのは青木ヶ原のような大規模なものもあります。プリニー式噴火というのは宝永噴火です。これも非常に大きい噴火です。火砕流というのはお聞きになったことがあるかと思いますが、ものすごくスピードが速いのでこれは怖いのです。富士山は玄武岩質の溶岩しか出しませんので、マグマしか出しませんので、火砕流というのはないだろうと我々専門家を含めて高を括っていたのですが、最近の調査によりますと富士山もちゃんと火砕流を出しています。これを考えなくてはいけません。それから先ほど言いましたように、土石流は直接必ずしも噴火には関係しませんが、やはり噴出物が後から大雨などで流されるということも含めると、これは災害としてあり得ます。大体この4種類。少し言うと最後、これは新聞などで読まれたこともあるかと思いますが、三体崩壊というのが面倒くさい。非常に大規模に山が崩れる。崩れるとそれが下に流れてくるのですが、高度が1,000m、2,000mという高い所から崩れますと、ものすごくスピードがつくのです。秒速100m以上。非常に遠くまで突っ走るの、そこにあるものはすべて潰れてしまい怖い。こういうものがなんと富士山というのは4~5回起こっているらしい。ただし、富士山の全体の年令というのは10万年くらい、10万年で4~5回くらいという、2万年に1回くらいではないかと考えられます。これが想定内か想定外かという問題になりますが、一番新しい崩壊は約2,900年前に起きたのですが、これは今の御殿場市全部を飲み込みました。今の御殿場市というのは大崩壊の堆積物の上に建っています。これはものすごい大変なエネルギーです。まず人間の力では防ぐことはできない。これをどうやって防災上対処するかというのはなかなか難しいです。

こういうふうにしていろんな噴火がございまして、他の火山の例がたくさんありますから、それを一生懸命調べて、これは有名なイタリアのポンペイという町のヴェスヴィオ火山です。これは宝永噴火と同じような灰が降ってきて、非常に遠くまで灰が降って

います。例えば宝永噴火というのを、現在同じような噴火が起こると計算すると2兆5千億円くらいの損害です。ここでまた金額ですが、人的被害は「死者なし」と書いてあります。ゼロかどうかはわからなかったわけですが、いずれにせよ、記録を見るとそんなに多くの人は死んでいない。ただ非常に迷惑していろいろ2兆円とかそれくらいの損害が出ている。物は考えようで、噴火の種類によっては案外人的被害は少ない場合もある。こういうことを理解した上で行動すべきであるということが言えます。細かい話は時間がないので飛ばさせていただきますが、そういうわけで火砕流というのは怖い。高温の火災物とガスの混合体が地表を流れる。秒速100mというすごい速さで来ることでも可能なのです。これは先ほど少しご紹介しましたが、雲仙普賢岳、43人の方がほとんど一瞬のうちに死んでしまった。こういう恐ろしい火砕流という現象が富士山でも起こるということを頭の中へ入れておく必要があります。

これは三体崩壊の1つの例で山が急に崩壊した連続写真です。これが実は富士山の図なのですが、ここが富士山の山頂です。宝永山がこの辺にあるのですが、東側へ崩れ出して広がったわけです。現在の御殿場市というのはこの辺です。次も御殿場市へ崩れるかということとはわからないので、もしかすると富士吉田市の方向に向かって崩れる可能性も否定はできません。富士山というのはこういうふうの実績があることはあります。これは土石流の画ですけれども、土石流というのも被害を与えることがあります。それから火山ガスが怖い、毒ガスです。これは結論を申し上げますと、富士山の噴火は火山ガスはあまり心配する必要はないです。なぜかと言うと噴火口がありましても、風に吹き散らされます。富士山の場合、地形的に確立が低いのであまり気にしないでもいい。ただし、もちろん濃度の高い水素とか二酸化炭素とか、こういうものの中に巻き込まれますと命にかかわるといことで、それに対してどうやって対処するかということを知っておく必要があります。あまり富士山でこれを気にする必要は実はないのです。

ということがありまして、これが今から10年くらい前にできたハザードマップです。私もこれを作るのに協力したのですが、今から思うとこれは非常に不十分です。現在、これから始まった協議会でもっときめ細かくして、大規模噴火の際に具体的にどうやって皆さんに避難していただくか、そういうことをもう少し詰めようという作業を現在やっているところでございます。1つの例ですけれども、富士山の噴火口というのは、山頂だけではなくて中腹にもあるのですけれども、それはおもしろいことに北西南東に伸びたところに噴火口が多い。だから次の噴火も多分この赤いところから噴火が起こるだろうと思ひまして、いろんなどころから仮定して、溶岩がもしここから噴火したらこっちへ流れる、こっちで噴火したらこっちへ流れるというようなことをコンピューターで計算して、これを全部まとめますとこのような図になるというのが1つの溶岩流に対するハザードマップです。なかなかわかりにくいと思いますが、こういうものを火砕流について、噴石についてなど、いろんなものを作ってそれをまとめてあるわけで、なかなか1枚の図にまとめるというのは皆さんにとってわかりにくいかもしれませんが、これをこれからさらに詰めていって、避難計画と同時に皆さんにわかりやすいようにしていきたいと思ひます。

最後にちょっと申し上げたいのは、皆さんご存じないかも知れませんが、噴火は気象庁が予報しますと言っている。地震は、あれだけ大きな地震があっても予報はできな

った。今の法律では噴火は実は予報するということになっています。これは最近変わったのです。申し上げたいのは、気象庁ですら認めているというか、正式にそういうふうになっているので、噴火の方がおそらく地震より予報しやすい。これは大体専門家の間でもそういう意見は一致しています。ただし、はずれることは頻繁にあるでしょう。50年前、60年前を思って下さい。天気予報というのはほとんどなく当たらなかったのです。私はその頃若い学生でしたが、今はどうですか。天気予報というのは50年前に比べると非常によく当たる。この頃は当たるのは当たり前ではずれると怒られます。おそらく今から50年先は噴火もある程度はそういう方向になっているのではないかと、少なくとも私はそう思いたい。だからそういう意味では希望があるわけです。これは1つは最近の測定器械がものすごく精密になって値段が安くなったので、富士山にはたくさん測定器が付けてあります。昔はそんなことはなかった。ですから今、例えば地震が起こって、それが前兆現象とします。すぐわかってしまう。ということがありまして、あまり大上段に振りかぶって皆さんに大丈夫ですと言うつもりはありませんが、最低限、地震とは火山の噴火は違ってきましたという嬉しい結果を申し上げたいと思います。これは当たる確立が少し高い、その程度です。一部の報道機関とかマスコミが、富士山の噴火予報を確実にできるような人がいるというようなことを言っていますけれども、あれは嘘です。予報というものはそんなに正確に当たるということはない。逆に言うと、地震よりは少しはましかと思いますが、実は私を含めてちゃんと真面目な研究者はそう思っておりますので、これは非常に嬉しいことで、それを活用して火山防災というものを進めていきたいと思っております。ご静聴ありがとうございました。

司会：荒牧講師、ありがとうございました。ただいまのご講演につきまして、ご質問の時間をいただきたいと思います。ご質問のある方は挙手をお願いいたします。なお、質問内容につきましては、ご講演内容に関連する質問と限らせていただきますのでご了承ください。アンケート用紙にも質問項目等を入れておりますので、お書きいただければ、後日、南関東防衛局のホームページの方でもご回答させていただきたいと思います。

質問者：南アルプス市から来ました。1つ質問させて下さい。先ほど、富士山の噴火のハザードマップを示されましたが、ハザードマップはそれぞれの噴火の場所を全部まとめたものだとご説明がありましたが、従いまして、あの図からしますと、噴火の状態によっては危険ではないところもあるというふうなことで考えてよろしいのでしょうか。

荒牧講師：私が申し上げたかったのは、あの図は間違っているところはないのですが、充分親切でないということです。ですから大体においては合っている。合っていると言っても繰り返しになりますが、確率的な問題で、ある線があるとそこから外は安全で内は危ないとかそういうものではないです。予想であります。そういう意味でさっきのご質問は、危ないところも含んでいるか、というご質問ですか。

質問者：いや、噴火の場所をいくつかまとめて示されたものだというふうに私の方は受け取ったのですが、ですからあのハザードマップが全て危険の範囲で、噴火の状況

によっては危険でないところも出てくるというふうなことで考えてよろしいのでしょうか。

荒牧講師：まさにそのとおりでございます。いろんなハザードマップがありますが、あれは可能性マップと言われている種類のマップで、どういうことかと申しますと、ここは噴火する可能性があります、ここは災害の可能性があります、必ずやられるというわけではない、そういう意味で噴火しないかもしれない、災害を受けないかもしれないところも色を塗ってあるという場合もある。いろんな条件があって、それを単純化して概念的に表したという表現でございます。答えになりましたでしょうか。

質問者：はい。わかりました。ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。その他、ご質問のある方はいらっしゃいますか。それでは荒牧講師、ありがとうございました。今一度、荒牧講師に大きな拍手をお願いいたします。

司会：続きまして、陸上自衛隊国際活動教育隊長・伊崎義彦 1 等陸佐による講演を始めさせていただきます。伊崎 1 等陸佐は、静岡県御殿場市に所在する国際活動教育隊長、兼ねて駒門駐屯地司令の職にあり、国際平和協力活動等に必要な教育訓練等を実施されております。昨年、東日本大震災では、前職である長崎県大村市に所在する第 16 普通科連隊長として、宮城県気仙沼市における行方不明者の捜索、生活支援等の災害派遣に従事されました。本日は「東日本大震災における災害派遣の記録」と題し、貴重な体験をお話していただきます。伊崎 1 等陸佐、よろしく願います。

伊崎 1 佐：皆さん、こんばんは。ただいまご紹介いただきました、静岡県御殿場市に所在します陸上自衛隊駒門駐屯地司令兼ねて国際活動教育隊長の仕事に仰せつかっております伊崎と申します。今の仕事は、今年の 3 月からやっていますが、前職で長崎県の大村市にある第 16 普通科連隊長として、宮城県気仙沼市旧本吉町で災害派遣の経験がございます。今日はその活動について皆さまにご紹介させていただきます。

荒牧講師は火山の専門家として長年やってこられていますが、自衛隊はいろんな仕事をやっており、私のバックグラウンドについて若干紹介し本題に入らせていただきたいと思っております。若い頃は第一空挺団という落下傘部隊にいました。東ティモールにおける PKO 活動、ミャンマー大使館の勤務もがございます。その後、国際活動教育隊長とつながっていくわけでございます。自衛隊の本職的な仕事として、第 22 普通科連隊の中隊長として、宮城県の多賀城というところ、震災の時、駐屯地に車を並べており災害派遣の時に津波が入ってきたという駐屯地で、それでもボートで多くの人命救助を行ったという部隊ですが、平成 15 年ごろ勤務しておりました。それから第 16 普通科連隊兼ねて大村駐屯地司令の際、まさに東日本大震災にあたりまして、気仙沼市南部で災害派遣を行うことになりました。

もう1つ、自衛隊についてももう少し簡単な話を述べさせていただきたいと思います。自衛隊の役割は大きく3つあります。大きく日本の平和と安全、国民の生命財産を守る。その中身は何かと申しますと外国軍隊からの警戒監視という部分、災害派遣、私が主として担当しています国際社会の平和と安全に貢献する国際平和協力活動という大きくこの3つがあります。また、あまり知られていませんが、南極観測船「しらせ」も海上自衛隊の仕事です。では国を守るとはどういうことか、我々は日々厳しい訓練を行っていますがこれは何のためか。もちろん外国の軍隊が来たときに防いで皆さんをお守りするためでございます。普通の家でも泥棒に入られないために警備会社に入っておく、また強そうな犬を飼って入りづらそうだから攻めにくいと相手に思わせる体制をとっておくことと同じように、我々が厳しい訓練を行い、そういう組織を作っておくことが戦いを招かないと、我々が強い国を作るということになります。また、レスキュー時代の任務となりますが、これは航空自衛隊のF15戦闘機ですが、ロシアとか中国とかの戦闘機が日本の領空にきた時には、常にこういう対応をとるように日々準備しております。また最近は大東諸島等をめぐり、中国との関係は難しくなっておりますが、海上自衛隊の対潜哨戒機が常に我々の海をしっかりと監視活動していることが、海の守りをしっかりとやっておくことが、戦わずして勝つという1つではないかと思えます。

災害派遣、今から東日本大震災についてお話しますが、それ以外にもいろんな活動をやっています。鳥インフルエンザの時の鳥の処分、この白い防護服も自衛隊員でございます。先ほど荒牧講師からお話がありましたが、これは雲仙普賢岳の時の火砕流が起きた後の行方不明者の捜索活動、私が所属しておりました第16普通科連隊が20年ほど前に活動したものです。また、離島からの患者の緊急搬送、これも大変多い災害派遣です。

もう1つが国際平和協力活動です。これは今行われている活動ですが、ハイチで大地震が起こったのですが、復旧の活動のPKO活動になります。また今年から始まったものですが、アフリカの南スーダンにおける国造りの支援活動です。こういったところに出て行って、被災したところ、もしくは紛争で厳しい状況の国の再建を助けることも大きな意義があるのですが、これに合わせていろんな国の軍隊と一緒に活動し、自衛隊が規則正しい団結力のある組織であることを示すことによって、日本は強い組織を持っているなかなか手を出すことができないと思わせれば、日本を守ることにもつながるため、国際平和協力活動をやっていく必要があります。また海上自衛隊を中心に行われておりますのが、ソマリア沖・アデン湾というところ一帯で行われております海賊対処活動です。日本の海上輸送の1つの生命線であるラインをしっかりと守るという活動です。こういうところでも日本の自衛隊は世界各地で活動を行っているということをご紹介します、本日の内容に入りたいと思います。

では、私が行きました東日本大震災の様子、先ほど荒牧講師からもご説明がありましたが、簡単に触れてから本題に入りたいと思います。マグニチュード9.0。記録の中では国内最大、世界的にも4番目の地震と私は承知していますが、この四連動の地震がここで起こったことにより非常に大きな被害をもたらしたものです。この写真は私が支援に行った地域の方が高台の家から撮影した写真ももらってまいりました。ご覧いただきますとこれが普段の海面です。ちょっと島が出ているのがわかると思いますが、高台

が海面から10m高くなっているところです。地震のあと最初の津波が押し寄せてきた姿がこちらです。高い波が押し寄せてくるのではなく、海がせり上がって押し寄せてくる感じだったと伺いました。ここは国道だったのですが、この線まで水が到達し、行きついたところです。波がまっすぐ入ってきたのではなく、いろんな方向から波が押し寄せ、渦を巻いて家を破壊している状態が起こった。最後にこの水が引いたところの映像は、皆さんなかなか見たことがないかと思います。先ほどの島の高さがこちらです。水の高さがこちらです。たぶん10m以上水が引いているのがご確認できると思います。今回の東日本大震災の津波被害があそこまで大きかったのは、まさにこの驚異的な引き波の強さにあると言えます。ここにあった家、もしかしたらこのトラックもそうかもしれません、海岸線にあった車、そしてそこにいた人たち、この引き波にさらわれていった、未だに不明者が非常に多いこともこれに原因があると考えます。今回の地震・津波の被害が最も大きかったのはこれが原因だったと思います。

では自衛隊の活動全体について簡単に触れていきたいと思います。今回、全自衛隊で10万人体制をとりました。今、自衛隊は24万人体制なので、実際はもう少し少ないのですが、陸上自衛隊は実員15万人体制で約7万人が派遣されたので約半分が災害派遣に参加した、まさに空前の規模の部隊集中と言えます。当時私は長崎県の大村の部隊だったのですが、親部隊が福岡の第4師団でした。九州からも5千人の隊員が東北地方に行って活動しました。海上自衛隊は1万5千人、当時地震直後は三陸沖に30数隻の艦艇が並んだという状況。航空自衛隊の2万人というのは、被災地に行った人というのではなく、それぞれの基地において航空輸送に従事した人も入っています。今回、1つ特徴的なのが、米軍が我々の組織に大きく入ってきたということがありました。「トモダチ作戦」という言葉はお聞きになったかもしれませんが、その作戦の中で日米の共同、そして一部米軍は独自で動いていて支援してきたということもありました。そういう意味では、今回の災害派遣は今までとは違った形で行われたということがご理解いただけたと思います。

どれぐらい部隊が急速に集中したかについてお話をさせていただきます。3月11日、震災が起きました。東北地方の部隊はそれぞれ担当地域が決まっておりますので、それらの地域にすぐに行っております。2日後には北関東から新潟までの部隊、さらに中部地方の部隊も入っております。我々九州の部隊、第4師団までは高速を使って、3日目には現地に到着しております。緑の部分は北海道の部隊で、フェリーで渡ってこなければなりませんので、4日目、5日目には現地に入っている。ほぼ5日後には5~6万の部隊が、そして10日目には当初予定されていた7万人体制がそろっている。これだけの部隊が動くというのはよほどのことがない限り起こりません。我々自衛隊にとっても初めての作戦でした。急速に部隊が展開できたのは、日ごろ訓練を行っていた成果だと思います。私が聞いたところによると、自衛隊のOBの方と中国の軍の高官が定例的に会議を行っており、本来議題になかった東日本大震災の話が中国側からあり、特に自衛隊はなぜこれだけ早く東北地方に部隊を集めることができたのか、お前たちはどういうふうに行っているのかと質問があったそうです。それだけ自衛隊は何かあった時に、これだけの部隊を動かせる力があるという、中国にとっても自衛隊が脅威になる、自衛隊はすごいというのを改めて知るきっかけになったと思います。災害派遣ではありますが、



これも1つの自衛隊の強さを示し、そして日本の抑止につながった行動ではないかと思っています。災害派遣全体の大きな流れですが、当初震災が起こりまして2カ月ほどは全力を集中した活動でした。我々九州の部隊も5月の初めに一旦任務を終了しております。その後は行方不明者の搜索の段階から生活支援を主体としたもの、それからもう1つ今回の災害派遣の特徴的なのが原子力発電所の災害、これの対処はずっと続いております。1回拠点から引き揚げたのですが、もう1回地域拠点に入るということで、最終的には昨年いっぱい自衛隊の災害派遣の活動が続いていたこととなります。

ここから私の所属しておりました長崎県の大村駐屯地の部隊の活動状況に移るのですが、まさに私が体験したところになりますので、これを紹介する形でお話させていただきます。この写真を見ていただくとわかりますように雪が降っています。3月11日以降、最初の1週間くらいはこういった状況の中で、被災された方々も相当厳しかったと思いますが、九州から来た部隊も相当厳しい環境の中での勤務となりました。

発災から現地に行くまでどういう流れだったのか簡単にお話いたします。11日の14時46分地震が発生しました。ちょうど私はたまたまテレビをつけていて、その発災のところから状況を確認していたのですが、先ほど経歴のところでも話しましたように、15年ほど前に宮城県に勤務しており、松島から石巻あたりまでが担当区域だったことから、ちょうど石巻に津波が押し寄せた映像を見たところで、これは今までの我々の体験したレベルを遙かに超えた被災状況だと思い、これは九州の部隊もたぶん出るだろうと考え、すぐに隊員たちに準備を始めさせ、この1回目の準備指示を出していた時には上の部隊から命令は来ていなかった段階なのですが、私たちだけでなく、それぞれの部隊がそれぞれの準備を始めていたと考えられます。翌日は土曜日だったので、当初から通常勤務に切り替えておりました。具体的に派遣されることが明確になってきておりましたが、実際にはどこに行くかはまだ明確になっていませんでした。お昼の段階で前進中でしたが、その段階でもまだ東京の朝霞駐屯地に向かっており、東北のどこに行くかなどは全く決まっておりませんでした。なぜ朝霞かというと、当時首都直下型地震の防災計画は全国規模で作っており、東北地方の対処についてはありませんでしたので、まずは首都直下型地震を準用して朝霞まで行くというところでスタートしています。その日の夜中、12日の発災翌日の夜中23時30分に部隊が出発しております。その時の人数約500名、車両約100台を超える数だったので、翌朝の未明4時くらいまでに部隊を順番に出発させるという形でした。九州自動車道から陸路を走り続けて、ドライバー2名で交代し、トイレ休憩をとりながら走り続けて、朝霞に到着したのが翌日の夕方。そこで仮眠をとって地図を受け取り、次の目標としたのが宮城県の王城寺原演習場。その時点でもまだどこに行くかは明確ではありませんでしたが、おそらく気仙沼あたりということでした。それで王城寺原演習場に到着したのが震災から3日目の14日の昼でした。そこで私は一部の人員をもってヘリで気仙沼市南部の本吉町というところに入れという指示がありましたので、最終的にそこに到着したのが15時半。発災から73時間です。救命のタイムリミットは72時間とよく言われます。九州から72時間で何とかたどり着ける、正確に言うと1時間オーバーしましたが、時間としてはそれだけのスピードで到着できました。ただ、我々が到着したときには、この地域には山形の部隊が入っていて、生存者はほぼすべて救出し、目に見える範囲も搜索は終了していました。

それで我々が交代して活動するということになりました。

我々が活動した地域がこちらです。これが宮城県の地図ですが、最初に目標としていた王城寺原演習場にテントを張って入りました。ここから災害派遣の現場まで約90kmありました。毎日2時間半、最初の方は雪が降ってこういう状態で宿営地を出発するとたくさん逸れました。それではなぜ近くに入らなかったか、入れる場所が全くなかったわけではなかったのですが、そういうところに入るとバラバラになることと、被災者にどうしても負担をかけてしまう。我々が組織としてまとめて動くためには、ある程度広い地域が必要でしたから、そういうことからここを拠点とするほうが良いという判断でした。まさに通勤をしながらの活動でした。気仙沼市の旧本吉町地区と呼ばれているところです。赤い線で囲まれているところが全部水が入ってきているところです。ここが我々の活動の場でした。これが本吉町の一番の中心地である小泉地区と呼ばれているところです。海岸線が小泉海水浴場という日本景勝百選に選ばれるくらい美しい松並木、砂浜があるところです。すべて砂がさらわれて田んぼに運ばれています。これは国道45号線、小泉大橋と呼ばれるものがあつたのですが、これは橋脚ごと全て流されています。道路も全部流されています。ここにJR気仙沼線が走っているのですが、線路が全部流されているという状況でした。またこの地域が小泉の部落の住宅地域だったのですが、1軒も残らず家が流され、全て土台だけが残っている状況でした。そのちょっと上に高台に小泉中学校・小学校があり、避難所として活用されていました。それほど高い地域でなかったのですが、微妙な違いで生き残るところとそうでないところが出てきていました。

我々の活動の状況です。現地では消防団の方々が自らも被災されながらも非常に頑張って活動しておられました。その消防団の方々と連携し、消防団の人に案内してもらって当初の活動はスタートしました。最初の頃は重機もまだ十分来ておりませんでしたので、JR気仙沼線の高架の上に家が乗っかっている写真ですが、最初はどうしてこのようなことが起きるのか不思議でしたが、このような瓦礫の山を1枚1枚めくっていきながら、生存者はいないかご遺体はないかと捜索を行っていきました。また、至るところが水没しており、水没しているところは濁っているので目で見て中の状況はわかりません。途中から釣り用のゴムの胴長がきたので、それを履いて棒でつつきながら作業を日々行いました。我々は普段戦闘靴を履いており、それは底に木のプレートが入っていて安全なのですが、水没している状況では履けませんので、戦闘靴を脱いで靴下でゴム長を履いていました。そうすると1日に2人くらい釘を踏み抜くんです。そういう状況ですが、それを消毒しながら確実に作業を行いました。

それから気仙沼はご承知のとおり漁業の一大地域です。魚介類の冷凍倉庫がたくさんありました。我々が到着した当時、魚が散乱していました。港の近くの高校の3階くらいに凍ったままのサンマやサバが上がっています。それが段々暖かくなってきて氷が溶けて、さらに重油が混ざってきて、強烈な臭いがするようになってきています。そのような中マスクはしていますが、服に臭いもしみつくし、普通にいと30分も耐えられないというような厳しい環境でしたが、隊員たちは不平を言うこともなく、こういったところをすべてひっくり返してご遺体がないかと捜索を行いました。海岸線もテトラポットも破壊されているのですが、中を確認しています。また、海に流された人がまた流

されて帰ってくるということがありますので、日々引潮になった時に海岸線を搜索して  
いました。途中から重機が充実してきましたので、搜索のスピードが段々上がってきま  
した。やはり自衛隊の強さは、このような機械を使えるということが大きく上げられる  
のではないかと思います。ここにアルバムを集めているところがあるのですが、震災後  
このようなアルバムを集めて洗ってきれいにして返すという報道が見られたかと思いま  
すが、私が知っている限り、このような活動をしていたのは2か所だけです。こういっ  
た集めたアルバムを最初は町役場に持って行ったのですが、役場の職員の方から「すみ  
ません、ご遺体のことだけで手いっぱい、とてもアルバムまではできません」という  
のが実際の現場の実態です。ここにおいておくわけにはいきませんので、海岸線にはプ  
ラスティックの籠が結構流されてくるのでそれを引き取って、こういったところに散乱  
しているアルバムをきれいにまとめて整理して、道路沿いのわかりやすいところに置い  
ておく。そうすれば避難していた家族の方々が来たときにアルバムをきれいな形で持っ  
ていけるのではないかと、我々にできる最低限の仕事とはこういうところでした。

先ほど施設部隊の話をしました。道路が完全に埋まっている状況でした。我々の活動  
は被災された方の生活を開く、そして未来を開くという活動だったのではないかと思  
いました。橋も落ちていましたので、自衛隊が持っているトラックの上に積んでいてそ  
のまま橋がかけられるものですが、しばらくはこれで交通を確保したところもありま  
した。またこの地域はこちら側の地域が完全に水没して、人も通れない船でしか通れない  
状況となっていたので、まずは救助用の橋を架ける、これで初めて交通が確保できたと  
ころです。また川もほとんど埋まっていたので、こういったところの瓦礫を除くとい  
うことも梅雨の洪水対策に非常に大事な仕事でした。実際の道路の状況はどうだっ  
たか、これはきれいになっていますが、最初はこういう状況だったのです。これをきれ  
いに全部除いて、これは国道45号線ですが、ここを通すというのが我々の大きな仕事  
でした。JR気仙沼線の下トンネルも完全に埋まっている状態でしたが、交通を確保す  
るのも我々の大事な仕事でした。

こういった仕事すると結構精神的にきついです、生活環境が非常に悪く中でやって  
いくのは、災害派遣でよく報道では自衛隊の人は冷たい飯しか食べていないというよ  
うな話がありましたけれども、もちろん大事なことでありますけれども、ただ期間が長  
くなっていくと、厳しい生活環境に身を置いていると我々の方がもたないということ  
もありました。どうやって隊員のやる気をつないで士気を上げていくかというところ  
ですが、我々の隷下部隊、四個の中隊というのが我々の部隊です。4日のローテー  
ションを作りました。ここの例でいいますと、まず先ほど言いました搜索です。いろ  
んな形での搜索活動を実施するのが1日。翌日は待機。待機と言いますのは生活支  
援に当たることです。そして翌日はまた搜索。そして4日目に休息、彼らは洗濯す  
る暇もないので、この日に洗濯したり、風呂に入ったりする日を作りました。この  
4日間のローテーションを作りました。その中で一番大事なのは生活支援のところ  
です。どうしても行方不明者の搜索やっていると、厳しい環境の中で人と会うこ  
ともなくなってしまう。生活支援のこういう場でいろんな方と声をかけ、住民  
の方からありがとうと言ってもらえる。これが我々の何よりもうれしいところ  
です。

これが避難所の一般的なところで、中学校の体育館です。こちらはお寺が避難所にな

っていたところですが、東北というのは、まだ地域のコミュニティが非常にしっかりしており、つながりが濃いところでした。このお寺も檀家さんを中心にして支援の方が集まっている。こういうところは非常に組織化されていて、例えば水道屋さんがいると山の方から水道を引いてきていたりとか、中には風呂を作っている避難所もありました。非常にうまくやっていましたが、なかなかこのような皆が集まっている避難所では束ねる人がいなくて、どうしても持ってきてもらった食事を食べて過ごしているところがあったように思われます。そういうところで我々も各避難所を回らして、それぞれのリーダーの方とお話をして、ここはどこが困っているのか聞き取りをやりました。そしてこのお寺の本堂は冷えるのでストーブがほしい、これは持って行っていいですかと許可を得て、我々が運ぶという仕事もやりました。これは小規模の避難所に生活用品をとりあえず一杯持って行って、これを広げて必要なものを持って行って下さいということもやりました。こういったところには必ず女性自衛官を連れて行きました。なぜかというところでも女性の声と言うのは我々には届きにくい。我々しかないと、特に下着の話など女性特有の話などはどうしても我々には話しづらい。もう1つ女性が1人いるとすぐその場が明るくなります。そのためこういった聞き取りをやる時、生活支援の場には女性自衛官をできるだけ連れていき、地域の人と良い形で会話できるようにしていました。

気仙沼市の集積場から一部の集積場までの物資輸送も我々の仕事でした。給水支援、最初は1人1リットルという決まりがありました。車が動き出したときから、皆さんが車のトランクに水タンクを1人1つ積んで、車で乗り着けて給水に来られて、このタンクには1トンしか入らないことから30分くらいで空になって、我々は必至で山の給水ポイントまでピストン輸送でやっていました。給水は大変大事なことなので、しっかり供給することが大事な仕事で、こういう活動をしていると、地域の人と話をして「ありがとう」と言葉をかけられますと、それが我々の活力になっていました。

こういう被災現場はトイレというのが非常に問題になります。今はほとんどが水洗トイレですから、水が流せないと最終的に流せない。また下水がやられていると水があっても流せないという状況になります。これはトイレに段ボールの仮設トイレをもって行って、この下にビニールを取り付けて1回終わるごとに縛ってごみに捨てなければならぬ。これも大変なんですけれども、こういうトイレの処置も被災地では非常に大きな問題になります。

ここに入浴セットを展開しておりますが、やはり日本人は、最後は風呂に入りたいというのが大きな要望になります。入浴セットはどこの部隊でも持っているわけではなく、私の部隊には持ってありませんでした。各市町村の市街地に1個という基準で、気仙沼市に1つあったので、ここ旧本吉地区では作れないという話で、要望を聞いておったのですが、たまたま1つ予備があるのを確認したことから、これは長崎県の対馬の部隊から持ってきてもらって、1つしかないことから時間で男湯女湯と分けまして入ってもらいましたが、非常に大好評で、お風呂上りの顔色が変わっていました。本当にゆっくりされてそれがまた大きな癒しになっていたのかと思います。

もう1つ我々が癒しとして取り組みましたのが、音楽部による慰問演奏です。この後皆さんもお楽しみになるかと思いますが、富士学校の音楽隊の演奏があります。音楽隊

というのは音楽の専門家で、まさに仕事として音楽をやっている方々です。我々連隊の音楽部というのはあくまでクラブであり、普段の仕事は普通にやり、訓練もちゃんとやります。その合間を縫って音楽活動を皆でやって、地域のために年間50～60回コンサートをやっています。災害派遣に出発する時、彼らも普通にメンバーに入っておりますので、楽器が必要かなどと言いながら長崎を出てきたのですが、やはり被災地に入ってみると、風呂の時もそうですが、何か癒しが必要だということで、何か皆さん暗たんとした表情をされており、やはりここは何とかして音楽やりたいと言っていた時、たまたま長崎の方から追走のトラックが1台やってくると話があって、とりあえず楽器だけ積んで持ってきて、隊員に行きわたりました。これは高校から借りたドラムセットで、これでフルセットの楽器をそろえて、その後13か所の避難所の全てでコンサートをやりました。各地でおばあちゃんは涙を流したり、小さい子供たちは上がってきてくれて一緒に歌ってくれたり、本当に歌というものが人々の心を癒す大きな力があるものだと改めて思いました。

その集大成として響高校、我々が拠点を作ったところですが、音楽の先生たちと話して合同演奏会をしようと。この響高校の吹奏楽部は震災がなければ3月15日にコンサートをやる予定で、それに向けて練習をやってきていたんです。震災があり学校にも出てこられなくなってしまった。そういう子供たちでした。いろいろ調整してホールで、ホールも危なかったのでホールの入口のところでやったのですが、前日に1日だけ音合わせの練習をして、彼らが実際演奏する予定だった曲を我々が練習してコンサートを行ったわけでございます。400人以上の人が集まりました。本当に私も何度も涙が流れてきたし、集まってきた人たちもこの高校生たちにも生きる勇気を与えることができたと思っております。

我々の活動を支えていたところですが、こういう指揮所は災害現場の高校を借りていました。宿营地の方では毎日ミーティングをしながら翌日どんな活動を行うか話し合いをしていました。当初は携帯電話が全く通じませんので、山の上の無線機を中継して、ずっと雪の中でトラックの後ろに寝泊まりしながら、24時間無線の中継を行っていたところでした。車両等の重機に関しても昼間は動いていますので、夜しか整備ができません。それでも壊れるんです。今度は整備に当たる人間が夜を徹して修理を行って直して、翌日また使えるようにしている。このようにそれぞれの機能がそれぞれ動けるといのが自衛隊の強さというものを改めて感じました。

宿营地での様子です。こんな感じで2ヶ月間生活しました。天幕内でくつろいでいる様子です。当然お酒も飲めませんので、そんなにくつろぐ状態ではないです。たまに病気になる奴もいましたが、自前の衛生をもっていたのでそれを中心に対処しました。食事については最初の2週間はレトルトパックです。レトルトパックをずっと食べ続けると最終的には便秘になります。その後口内炎になります。私もなりました。家族から段ボール1箱分だけ荷物を送ってもらえる時には、野菜ジュースとビタミン剤を送ってくれという話をしました。2週間を超えてくると、ご飯を炊いたり、ちょっと野菜を食べたり、もちろん被災された人の前で温かいものを食べることはしませんでした。後ろに下がった時に若干リラックスする場をもたないと今度は我々の活動がもたないというバランスをとるところも重要なところだと思います。

そういうところも含めて、長崎から気仙沼まで1,800kmあるんですが、長崎の方にも人を必ず残しておかなければならないので、1個中隊を最初残していたのですが、途中でそれを少しずつ入れ替えながら、約5日ほど休むため一旦長崎に返すようにしたのですが、皆下がりがたがらない。1回下がってもまた上がりがたがっている。そういう意味では本当にみんなが厳しい現場でしたが、前向きにやってくれたのはありがたかったと思っています。

周りからの声です。これだけ「いつもありがとう」という看板を作って我々の通勤経路で待っていてくれる子供たちもいました。また大きな看板でありがとうと表示してくれているところ。また、子供たちが最初は会釈していたのがいつの間にか敬礼してくれるようになっていたんです。これも自衛隊を受け入れてくれてきたのではないかと思います。このまま自衛隊に入ってくれないかなと思いました。おばあちゃんたちも我々が通る時に手を合せて拝んでくれました。子供たちからたくさんの手紙をもらいました。これも将来自衛隊になりたいと書いてありました。また、きれいなお風呂に入れてくれてありがとうという手紙ももらいました。こういう1つ1つが我々の活動を支えてくれたんだと心から思っています。

最後に帰る時にこのような大きな見送りもしてもらいました。そして本吉町の図書館には陸上自衛隊の大村駐屯地の、たぶんまだあると思いますが、駐屯地新聞などを飾ってくれて、こういうふうに地域との繋がりがまだ続いています。私も今年4月にプライベートで現場を訪れたのですが、非常に歓待を受けまして、厳しい時に行ったからということもあるのですが、そこで作ったこういうつながりは、日本人として非常に大切にしなければならぬと感じているところです。

派遣されなかった隊員たちも非常に活躍しました。どちらかという駐屯地に残っていると、なぜあなたたちは現場に行かないのと冷たい声をかけられることがあり、肩身の狭い思いをすることもありますが、特に人数が半分以下になったところで、普段やらなければいけない駐屯地の警備でありますとか、また当然長崎は長崎で災害派遣に対応しなければならぬ。そういうところでは人数の少ないところでやらなければいけない。実は残った人たちの方が大変だったのではないかと、そういうところを含めると全自衛隊で対応していたということがご理解いただけたらと思います。

ちょっと時間もなくなってきたので、簡単に私が所属している中央即応集団による原子力災害派遣対処についてお話させていただきます。中央即応集団というのはいろんな不思議な部隊がぶら下がっております。私がいる国際活動教育隊もここにあります。今回特に活躍したのは中央特殊武器防護隊という化学兵器などに対応する部隊、ヘリコプターの部隊、私が若い頃いた落下傘部隊、最も厳しい現場に必ず投入される部隊です。これは3月14日に福島第1原発が爆発したときです。この時にちょうど中央特殊武器防護隊の隊長が乗った車が、現場の近く、もう爆発することはないということから入っていたところで、これだけ被害を受けました。たまたま重症者はいませんでした。ぎりぎりのところで大きな損害は回避したんですが、こういう状態の中で我々は活動していたということを見ていただきたいと思います。

また、これはヘリコプターで放射線の測定をしているところです。これもヘリコプターで、どれだけ放射性物質が入ってくるかわからないし、ヘリコプターに一旦放射性物

質が付着すると取り除くのが非常に難しいため、通常なら絶対やらない活動だったのですが、これもほぼ命がけの形でやっています。このヘリコプターで水をまいた、しかもこれも陸上自衛隊の消防車ですけれども、注水して原子炉を冷やしたという活動も決死の形でした。最後は、警察、消防も全部自衛隊がコントロールする形で活動したというふうに聞いております。避難における除染活動、この除染活動なども先ほど言いました特殊武器防護隊が中心になって行っています。こちらは駒門駐屯地の戦車です。実際使うときは一度もなかったのですが、ここに戦車の前に排除板がついており、これで瓦礫を除去しようと現場までもっていきましたが、あまりに大きすぎて、また視界が悪すぎて使えなかったというちょっと残念な状況だったのですが、こういうところに我々も従事しました。あとは地域の除染など非常に放射線が高いところに入って行って、土砂の除去など行った後に行方不明者の捜索に入ったのですが、これはみんなが放射線の線量計をつけて計りながら、1日どれくらいの放射線を浴びたか、まだ大丈夫か、まだ大丈夫かと言いながらやっていた活動です。これが除染です。こういうこともやりながら、自衛隊は原子力災害派遣を行っていたところをご理解いただけるかと思います。

ちょっと所見がありますのでご紹介させていただきます。この一番厳しいところに入っていった私の先輩が、大体私と同じような連隊長という立場で指揮官として現場に入ってしまったとき、4月に指揮官を交代して若干あとから現場に入っていたのですが、彼は日々活動の最前線に立ち、ある意味放射線を浴び続けた。なぜなら自分がそこに立っていれば隊員が安心できるからです。もともと一番放射線の量は少なかったのですが、段々高くなっていき、仕事が終了するときは総放射線の量は部隊で2番目になっていた。そんなの自慢できないだろうと思うかもしれませんが、そうしないと部隊を指揮できなかった。それだけ厳しい中で身を呈して体を張って活動していたのが陸上自衛隊だったということをお伝えしたいと思います。

最後におまけでお話をしたいと思います。今回自衛隊の多くの部隊が東北に入り、そして自衛隊は1つになりました。今回は東北の司令官の下に全部の部隊がぶら下がりましたが、そのように一元化し情報共有できる、たぶんあの時点で一番情報を持っていたのは自衛隊だったと言っても間違いなかったと思います。自分たちで何でもできる、特に施設やいろんな生活支援能力をもっています。こういうところを含めて、災害対処は自衛隊と言われるゆえんだと思います。しかしながら組織が大きすぎて重い、また私自身も感じたところですが、やはり初期の段階での対応です。本格的な対応となれば、専門的な大きなところが入っていき、早くそれを切り替えることが大事かと思います。残念ながら今回そのあたりは今一つうまく切り替えられていないのかと、この前石巻に行ったときにもそういうのを感じました。

自衛隊にとっては数少ない実践の場で、我々自身にとっても存在意義を確認したところでした。これはちょっと触れておきたいのですが、現場に来る隊員は、たぶん若い子たちは自分の家族の亡くなられた姿も見ない子たちが、本当に泥にまみれたご遺体をきれいにしてそれを収容していく。昼を食べることもできず、たぶん相当精神的にきついものがあったと思います。それでもやはり自分しかできない。自分がやらなければ誰がやるんだという思いがあればできるんだと思います。そういう意味で言うと、逆にそういう場を我々大人が子供たちに与えることができていないのではないかと感じ

ながら仕事をやってきました。もう1つ、そういうやりがいを持って集中力を高めると毎日90kmを往復していても一度の事故も起こりませんでした。そして今回よく想定外という言葉がでましたけれども、我々の世界で不測事態と呼んでおりますけれども、不測事態を早く予測事態に変えることが大事なのかと。いろんなところを見積もって想定外といういろんなところを想定して考えなければいけないと。そして最後は、現場は権限を与えられなければなかなか動けない。今回権限を与えられて活動ができていたと思います。そういう中でこれからもいろんなことをおろそかにせず、全てに十分な準備をすることは難しいと思いますが、その中でやはりこういうものをほしい、こちらの方はしっかり現場に任せられる体制をとるとというのが大事なのではないか、というのが今回私が現場での活動を通じて得た所見でございます。これで終了させていただきます。

司会：伊崎1等陸佐、ありがとうございました。やはり現場で体験されたお話ということで、自衛隊の活動が大変よくわかる講演をいただきました。ただいまのご講演につきまして、ご質問の時間をいただきたいと思います。ご質問のある方は挙手をお願いいたします。なお、質問内容につきましては、ご講演内容に関連する質問と限らせていただきますのでご了承ください。

特にご質問の方もいらっしゃらないようなのでここで終了させていただきます。伊崎1等陸佐に、今一度大きな拍手をお願いします。

ここで、第2部の陸上自衛隊富士学校音楽隊の演奏会に入る前に、10分間の休憩を入れさせていただきます。開始時間につきましては、20時10分から始めさせていただきます。

## 【第2部】

司会：続きまして、第2部の陸上自衛隊富士学校音楽隊の演奏会を始めさせていただきます。富士学校音楽隊は、地元静岡県を中心に、定期演奏会、富士総合火力演習、各種イベントなどで演奏活動を行っています。本日は、「響け 富士北麓の夜空に」と題しまして、世界文化遺産登録への応援の気持ちも込め、力強くも美しい音色をお楽しみいただきたいと思います。それでは、この先の進行は、齋藤音楽隊長にバトンタッチいたします。どうぞよろしくをお願いします。

## 【音楽隊演奏】

司会：富士学校音楽隊の皆さん、ありがとうございました。現在、秋の文化祭シーズンということもあり、音楽隊の皆様は土日も休みなくご活動されているとのことです。

素晴らしい演奏をいただきました音楽隊の皆様にもう一度大きな拍手をお願いいたします。

本日は長時間にわたり、またお子様も最後までお付き合いいただきありがとうございました。富士吉田市ではじめて開催した防衛問題セミナーでしたが、防衛省・自衛隊を理解していただく一助となったならば幸いです。



以上をもちまして、防衛問題セミナーを終了させていただきます。  
誠にありがとうございました。  
お手元の「アンケート用紙」につきましては、出口の「回収箱」に投函していただきますようお願いいたします。

以 上